

# Photokina 2012 報告

日本カメラ博物館 運営委員

市川 泰憲

〔開催地〕 ドイツ・ケルンメッセ

〔開催期間〕 9月18日～23日（17日はプレスデー、現地日時）

ドイツ・ケルン・メッセで偶数年に開催される世界最大規模の写真機材ショー「フォトキナ2012 (photokina World of imaging)」が、2012年の9月18日から23日までの5日間にわたって開かれた。第1回フォトキナの開催は1950年なので、すでに60年以上の歴史があることになる。

その長い歴史のなかにあって、この場から多くの新製品が発表されてきた。古くは1954年に登場した「ライカM3」がある。この時点でライカはレンジファインダー機において日本企業を寄せつけない圧倒的な技術力の強さを見せ、日本勢は開発の矛先を一眼レフに向けることになる。結果として1964年にはカメラ生産が数量・金額とも日本が西ドイツを抜き、今日に至っているのは言い古されてきたことだ。

そのような60年近くも前のことを、いまさら引き出すのも気が引けるが、やはり

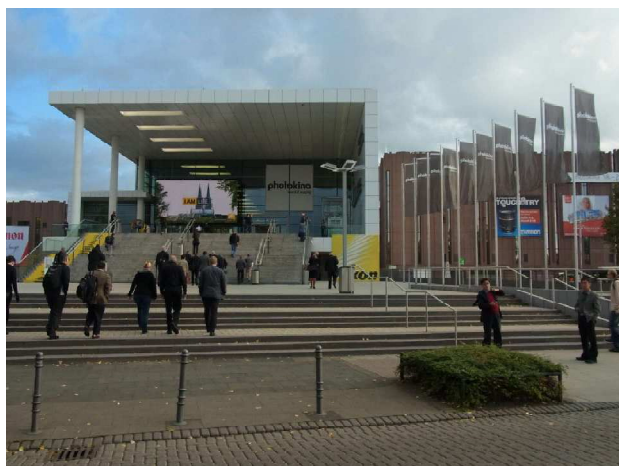
フォトキナは日本のカメラ産業にとっては歴史とともに、ドイツという特別な地への思いを感じさせる写真機材ショーである。

## JCII 写真展

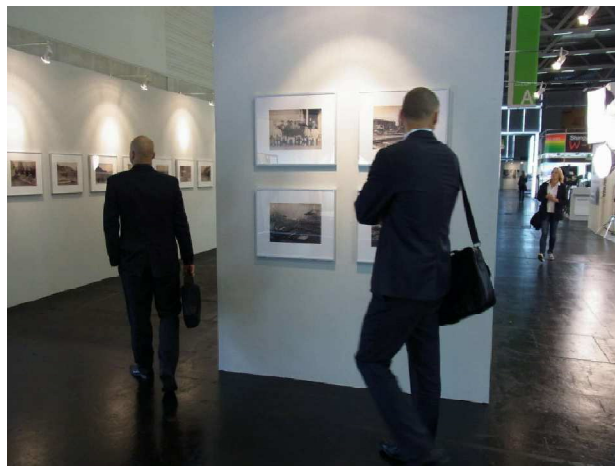
今回フォトキナ会場で、日本カメラ財団(JCII)は「Tsunami ~ 116 years ago ~」というタイトルで明治三陸沖地震の歴史的な写真



JCII 写真展示 「Tsunami ~ 116 years ago ~」



ケルンメッセ南入り口



JCII 写真展示 「Tsunami ~ 116 years ago ~」



JCII 写真展示 「Tsunami ~ 116 years ago ~」



JCII 写真展示 「Tsunami ~ 116 years ago ~」



JPS「生きる」-Post TSUNAMI- 写真展プレス発表会で挨拶する田沼武能 JPS 会長



JPS「生きる」写真展プレス発表会で配布されたJCII 写真展「Tsunami ~ 116 years ago ~」のリリースを見入る人

を展示した。JCII 写真展“ Tsunami ~ 116 years ago ~ ”は、挨拶パネル、解説パネルに加え半切40枚の写真を展示した。なおJCIIでは、過去6回にわたってフォトキナ会場において日本を紹介する写真展示を行ってきている。

また今回は、別ホールで、日本写真家協会がタムロンの支援を受けて“「生きる」Post Tsunami ”というテーマで2011年の東日本大震災の写真を展示した。日本における地震と津波の惨状の旧新をフォトキナ会場で見られたわけだ。

### JPS「生きる」写真展

日本写真家協会(JPS)の「生きる」-Post TSUNAMI- 写真展はプレス発表会が写真展会場で開催された。この写真展のためにJPSからは田沼武能会長を含め5人が、フォトキナ会場入りしている。プレス発表は、タムロン



JPS「生きる」写真展プレス発表会の会場で歓談する日本からのジャーナリストとタムロン担当者

担当者の司会と通訳が入り、田沼 JPS 会長、ケルンメッセ副社長のヴォルフガング・クラッツ氏の挨拶に引き続き、JPS「生きる」写真展実行委員長の管洋志氏の経過報告がなされるなど、海外ならびに日本からの取材陣を前ににぎにぎしく行なわれた。



ライカ・カメラ社は、新製品展示と写真展のためにホール1をすべて借り切った



入り口のゲートをくぐると、クラスごとに分かれた新製品コーナーがあるが、全体的にゆったりとしている



製品展示コーナーの奥にギャラリーがあり、著名な写真家の作品が飾られている



ギャラリーの手前にはステージがあり、この場所で発表会が行われ、写真家によるトークショーなども催された

このプレス発表会では、JPSとタムロンのご好意により、JCII 写真展告知のニュースリリースも同梱していただくことができ、日本を始め海外を含めた多数のマスコミにも日本カメラ財団の取り組みを理解してもらえたと考えられ、会期中にはJCIIの写真展会場へも多くの人に足を運んでもらうことができた。

## ライカカメラ社

かつてフォトキナといえば、ライカ、ローライであり、アグファ、コダック、ポラロイドなどが一番目立つ場所を占めていた。今となっては、感材メーカーの出番はほとんどなくなったが、今年のフォトキナで、最も元気だった企業は地元ライカ・カメラ社ではなかっただろうか。

ライカ・カメラ社は展示会場として、ケルン・メッセのホール1を全面的に借り切った。そして新製品は、カメラだけでも複数あり、最大の注目新製品は「ライカM」だ。距離計連動、ライカ判フルサイズ2400万画素のCMOS撮像素子、ライブビュー、HD動画撮影可能などが基本的な特長である。ライブビューが可能になったことにより距離計連動機の交換レンズの最長焦点距離135mmという制約が外れ、別売のマウントアダプターを取り付ければ、過去に発売された一眼レフライカフレックス用Rマウントレンズのほとんどが使用できる。

昨今、一部マニアは、ミラーレス機で、マウントアダプターを交換するによりクラシックレンズ遊びを楽しんでいるが、いずれもAPS-C判であったのが、ライカ判フルサ



新製品紹介するライカカメラ社オーナーのDr. カウフマン氏（左）、右は技術担当責任者のステファン・ダニエル氏



ピューリッツァ賞作品の前でカメラマンのニック・ウット氏とキム・フック氏



新製品ライカMをうれしそうに構えるライカカメラ社オーナーのDr. カウフマン氏。日本からの参加者も多い。



当日の新製品であるライカM、ライカM-E、ライカXアラカルト、ライカX2 Paul Smith Editionなどを一抱えに持つ

イズで楽しめるようになったことになる。

このほか、従来からのCCD撮像素子のライカM9からファインダー切り替えレバー、USB端子を省略し、上下カバーをダークなハンマートーン仕上げにして普及タイプとした「ライカM-E」、中判のS2をライカMと操作系を同じようになるよう80カ所変更したという「ライカS」、ライカX2にイギリス人デザイナーのポール・スミスが配色を施した「ライカX2 Paul Smith Edition」、ライカX2を上・底蓋とレザーのカラーを選べる「ライカXアラカルト」、24～90mm相当画角のズームコンパクト「ライカD-Lux6」、25～600mm相当画角レンズ非交換一眼スタイルの「ライカV-Lux6」などと多彩だ。

しかし、これら新製品をもってしても5,000平米あるというホール1すべてを埋め

られない。それで2,000平米を新製品とショー展示に、3,000平米をライカを使った作品の展示にとスペースに分けていた。

この写真展示は世界各国の写真家の作品が飾られたが、特に“ライカホールの荣誉”としてピューリッツァ賞受賞フォトジャーナリストのニック・ウット氏とホルストFASS氏がたたえられた。

ニック・ウット氏は、米国ロサンゼルス在住でベトナム戦争当時AP通信サイゴン支局の報道写真家だったが、ナパーム弾の爆撃から逃れる村人たちを撮影した「戦争の恐怖」と題した作品が、1973年にピューリッツァー賞を受賞している。

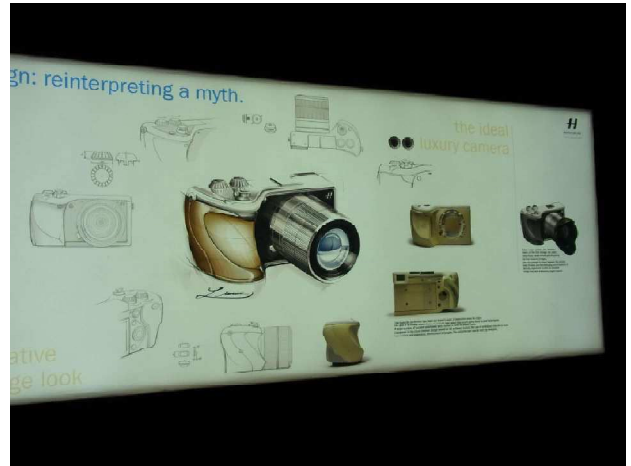
発表会には、当時6歳で撮影された少女キム・フックさんもカナダから駆けつけ、ニック・ウット氏と共に会場に現れた。このあた



ライカ M ボディに、マウントアダプター、EVF を取り付ければ、レンジファインダー機の限界を超えた、マクロ撮影や超望遠撮影もライブビューで可能となる



ライカ X2 ポールスミス



ハッセルブラッド社「ルナ」カメラのイメージデザイン。オリジナル NEX より、かなり大きい



ハッセルブラッド社ルナカメラ。さまざまなカラーバリエーションが用意されていて、手作り感にあふれるボディだ

りは、カメラが写真を撮る道具であり、その写真がそれぞれの時代というか、歴史をしっかりと記録してきたということを巧みに演出しているわけだ。日本人写真家としては荒木経惟氏の作品が展示されていた。

なお発表会は、18時に入場開始で、19時開演、新製品が披露されたのは21:15、その後フォトキナ会場のホール1をすべてフルオープンさせたが、発表会終了はドイツ式で午前2:00となっていたが、とてもドイツ人の体力にはついていけない。

発表会のときは、あまりにも参加者が多く、ほとんど現物は手にすることはできなかった。後日再度ライカカメラ社ブースを訪ね、ライカカメラジャパンの福家一哲社長と日本人スタッフから、ゆっくりとライカM、ライカMアクセサリー、ライカX2

ポールスミス、ライカXアラカルトなどの新製品をゆっくり手にとらせてもらい、詳細を聞くことができた。

### ハッセルとソニーが業務提携

ハッセルブラッドといえばかつて中判のフィルムカメラではプロ用機材メーカーであったが、デジタル時代にあっては中判機と高画素機とがどのようにすみ分けるか、未知数な部分があるが、なんとこの時期ハッセルブラッド社と日本のソニーが業務提携し、従来からの中判路線とは180度方向転換し、ソニーのNEXをベースにした“Lunar”というミラーレス機を発表した。

ルナは1962年に宇宙飛行士ウオーター・シラーによってハッセルブラッド500Cが宇宙に持ち込まれてから50周年であることが



ハッセルブラッド社ルナカメラ。標準ズームレンズ付きといったところだろうか



トランスルーセントミラーを組み込んだマウントアダプターを取り付け マウントフルサイズカバーのカール・ツァイス 16 ~ 35mmF2.8 を装着



トランスルーセントミラーを組み込んだマウントアダプターを取り付け マウントフルサイズカバーのソニー G70 ~ 400mmF4-5.6 SSW レンズを装着



イーストマン・コダック社のブース。特にフィルムなど銀塩感材の展示は見る事ができない

ら名づけられたとされる。

ボディは、手作り感をもたせており、ソニーNEXより大型に仕上げられているが、マウントは Eマウントで、交換レンズもそのまま。価格は50万円ぐらいとされている。ハッセルがミラーレス機をというより、日本の電機メーカーと組んだところが時代を感じさせ、この協力関係は今後一眼レフにまで及ぶとされる。なお、ソニーはすでに Eマウントで35mm判フルサイズの動画カメラを発表しており、ハッセルブラッド・ルナがフルサイズで発売される可能性もある。

ハッセルブラッド社の現社長である Dr.Larry Hansen氏は、それ以前にカール・ツァイスのアジアパシフィックの社長を日本で長い間にわたり務めた人で、日本との関係はかなり深いという。ソニーとはカー

ル・ツァイスレンズの取引の関係から旧知だということで、今回のような提携話が進んだと聞いた。

## コダック

イーストマン・コダック社は、この春に業績の悪化からカラーリバーサルフィルムからの撤退を発表したが、その後さらにフィルム事業の売却まで発表するに至っていた。その直後のフォトキナであるので、どのような発表、アナウンスがあるかは不明であったが、注目企業のひとつであることは間違いない。

現地にいたコダックジャパンの常務執行役員でコンシューマービジネス本部長の飯島栄三氏によると、コダックはコンシューマー関係の写真部門を売却するとかかなり身



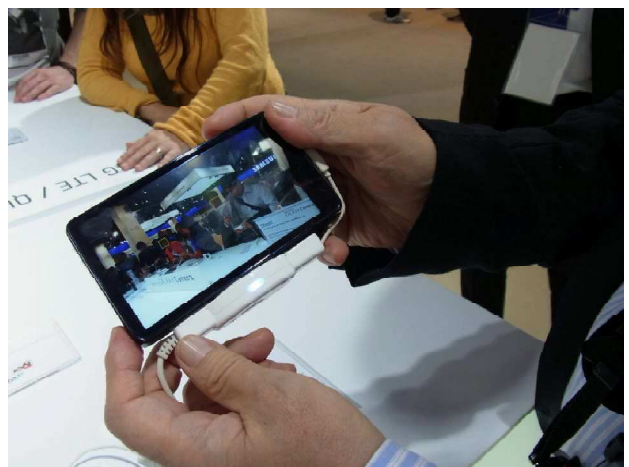
プレスコンファレンスで挨拶する、次期イーストマン・コダック社パーソナル事業部の社長 Laura G. Quatela 氏



ギャラクシーカメラとミラーレスのNX を解説するハン・ミョンソプ副社長（事業部長）



ギャラクシーカメラを手にしているところ。意外と大きいなという感じがする



ギャラクシーカメラの背面液晶ディスプレイ。サービスサイズL 判程度のプリントより大きい感じがする

軽になり売り上げが伸びるということで、この時期は社員は売却に向けてだいが力が入っているとのことだ。

プレスコンファレンスの挨拶は、女性の Laura G. Quatela 氏で、次期コダック社のパーソナル事業部の社長だという。また、今後の事業戦略の解説も IT 情報関連のことがメインとなっており、かつての感材メーカーとしてのコダック社は片鱗も感じさせない。

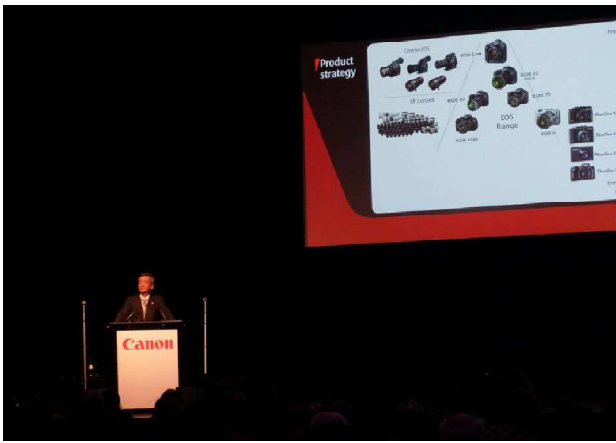
## サムスン

サムスンは、今現在アップルとの係争を抱えているが、企業規模では大きく、日本のカメラメーカー以外で、世界中で唯一、撮像素子を含めてカメラを作れる会社である。

サムスンは、この時期元気のいいカメラ関連企業の1つということができ、その新製品発表会というかパワーは見ておかななくてはならないと思った。

発表会会場は、北側プレスセンターの置かれた建物のラインザールのホールを使い、ざっと見た目では200人近くの報道関係者が集まった感じだ。

今回、サムスンの新製品の目玉は、プラットフォームにアンドロイドOSを搭載し光学21倍ズームレンズを内蔵した「ギャラクシー・カメラ」である。また、ミラーレス機の「NX20、NX210、NX1000」がこの時期の新製品だが、いずれもWi-Fi機能を搭載し、交換レンズ群の充実などがポイントとなっている。



キヤノンのカメラ戦略を解説するイメージコミュニケーション事業本部長の真栄田雅也氏



ニコンのプレスコンファレンスに集まった多数のジャーナリスト



小型化されたキヤノンフルサイズ一眼レフEOS6Dの解説



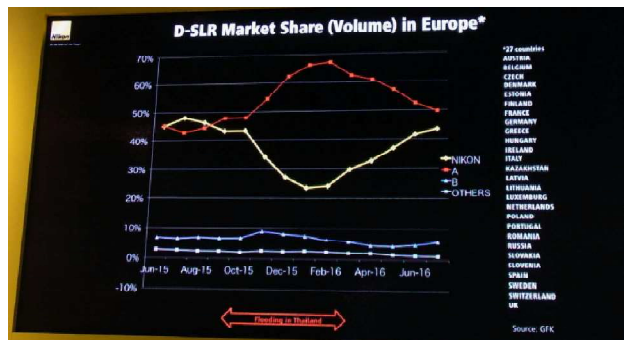
ニコンがヨーロッパでどれだけ伸ばしているかを紹介するニコンヨーロッパ社長土田氏



スチル、シネカメラ、プリンターを展示するキヤノン

## キヤノン

キヤノンはプレスカクテルという形で新製品発表会を開いた。場所はメッセのライン川沿いの Rheinterrassen, Tanzbrunnen Kölnであるが、途中地下道を通らなくてはならないなど、プレスセンターからは徒歩で楽に20分以上ある。このプレスカクテルでは、300人以上は入っているだろうと思わ



ヨーロッパ市場におけるニコンのシェアの伸び

れる大ホールでのキヤノン真栄田雅也イメージコミュニケーション事業本部長のEOSシリーズを主体にしたEOS6DとEOS Mの位置づけなどの基調講演のほか、新製品のタッチアンドトライなどが行われた。

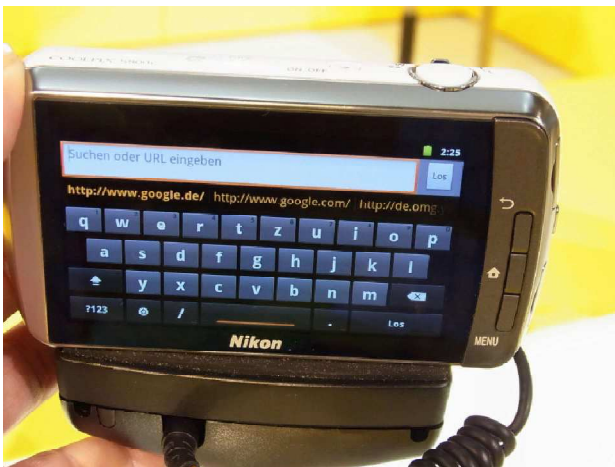
## ニコン

ニコンの発表会の主催はニコン本社でなく、ニコンヨーロッパということで、場所はニコンブースの中で実施された。商品とし





アンドロイドOS搭載のコンパクト機「ニコンS800」



ニコンS800の背面液晶。タッチパネル式の背面液晶で文字入力ができる

では、この時期発表のフルサイズ普及機の「ニコンD600」と、アンドロイドOS搭載のコンパクト機「ニコンS800」が目玉であり、発表会の内容もS800への解説がメインとなる。この辺りは、S800はWi-Fi環境の整ったヨーロッパでの販売拡大を目指しているが、同じアンドロイドOS搭載でのサムスンのギャラクシーカメラとどのように住み分けるのか興味あるところだ。

後日展示会場を見て歩くと、明らかにD600コーナーの前は人だかりがすごく、やはりニコンではコンパクトカメラより一眼レフカメラが人気は高いように見えたが、ニコンの市場分析によると、一眼レフカメラとコンパクトカメラともヨーロッパ各地で爆発的な急伸を示しているようで、勇ましい話ばかりが目についた。

実際発表会はすべて英語で話されたが、



ペンタックスリコーのブース



ペンタックスリコー赤羽登社長とドイツ駐在スタッフの青木氏。このほか日本から広報の川内氏もきていた

その勇ましさは話し方でも十分に感じた。

### ペンタックスリコーイメージング

ペンタックスリコーイメージングの赤羽昇社長を訪ねた。赤羽氏は社長になる前に日本カメラ博物館を訪問されており、そのときに名刺交換をしていたので、アポイントなしでブースを訪れたが、気軽に会ってもらうことができた。

聞いた内容は、旧ペンタックス製品と旧リコー製品の住み分けが、今後どのようになされるかということで、特にリコーのコンパクトユーザーには、GRやCXシリーズのように他社にはない熱烈なファンもいるので、今後も積極的に継承して欲しいということだった。これに対し、赤羽氏は今現在はペンタックス製品に力を入れているが、2013年はリコー製品に力を入れるからとい



左から、CIPAの寺田氏、後藤氏、凸版印刷の木村氏



ケルンメッセの北入口



ソニーアルファの新製品ラインナップ



キヤノンの写真展示。ライカカメラ社が例年の写真作品展示場をすべて貸し切ったために、メーカー展示会が、廊下に押し出された感じだ



センサーを作るソニーらしくレンズ非交換で35mmフルサイズセンサーを搭載したコンパクト機「RX-1」

うことであった。

## CIPAのプレスコンファレンス

カメラ映像機器工業会(CIPA)は横浜での「CP+2013」の開催に向けたプレス発表会を開いた。司会は凸版印刷の木村和也氏で、CIPA寺田氏(ニコン)と後藤氏(ニコン)によりプレゼンテーションがなされた。



昨年までは、パナソニックとオリンパスはマイクロ一眼と呼んでいたが、CIPAがノンレフレックスと呼んだら途端にミラーレスと呼ぶようになり、最初のミラーレス機をアピールするようになった



パナソニックは一眼レフスタイルのGH3をメインに打ち出す



オリンパスのブース



シグマのブース



プレスの前で挨拶するオリンパスイメージング小川社長



シグマの山木和人社長



タムロンのブース



富士フィルムのブース



カシオ計算機のブース



ノーリツ鋼機のブース



カール・ツァイスのブース



フィルムカメラでビジネス展開するアルカスイスのブース



ドイツの感材メーカーとして名門のテテナール社ブース



ブロンカラーのブース



イルフォードのブース



世界中でドイツのフェリックスシラー社だけが写真印画紙用バラ板原紙を製造供給している



コダックのインクジェットペーパーをライセンス生産している中国メーカーのブース



パーマジェット社のブース



35mm フルサイズセンサーのビデオカメラ「ソニー NEX-VG900」



フォトキナシンボルの地球儀。床、地球儀 5 大陸などすべてがカラープリントのモザイクを張り合わせて見せている

## フォトキナ 2012 を終えて

第32回フォトキナは9月23日に閉幕した。ケルンメッセ事務局からのファイナルレポートによると、166カ国から18万5000人が来場し、前回の2010年(18万1464人)よりも来訪者数が増加したという。

ここ10年ほどのファイナルレポートから、出展社数、出展国数、来場者数などを比較してみると、来場者数、来場者国数は増加傾向にあるが、しかし出展社数、出展国数、展示面積は減少傾向にある。これは、銀塩感材からデジタルへと産業構造が変化したことにより起因すると考える。

フォトキナの正式名称は、日本語にすると「第32回フォトキナ：ワールド・オブ・イメージング」となる。特にこの10年間の変化は大きく、かつて感材メーカーであった、アグファ-ゲバルト、コニカ、ポラロイドなどの撤退が出展社数や展示面積に影響を及ぼしたのだろう。一方でワールド・オブ・イメージングと称されても、かつてのように家電、電氣的な映像機器メーカーがビデオ機器などに直接的に関与しているわけではなく、成熟したカメラ産業の姿をここに見ることができる。そのような状況のなかで海外カメラメーカーである、ライカカメラ社とハッセルブラッド社の見せた動向が、180°異なる点は興味ある。

開催年	出展社数	出展国数	来場者数	来場者国数	展示面積
2012	1,251	45カ国	18万5千人	166カ国	15万㎡
2010	1,251	45カ国	18万1千人	160カ国	19万㎡
2008	1,523	49カ国	16万9千人	161カ国	21万㎡
2006	1,579	46カ国	16万2千人	153カ国	17万㎡
2004	1,589	46カ国	16万人	128カ国	20万㎡
2002	1,546	46カ国	16万人超	?	?

ライカカメラ社は新型「ライカM」の心臓部となる撮像部のCMOSをベルギーのCMOSIS社製を使用し、一気にライブビュー、ハイビジョン動画を可能とした。さらに、この時期は最近にない利益を生み出しているとのことだが、現在ゾルムスにある本社工場は、ライカカメラ発祥の地であるウエッツラーのライカパークに新社屋を建設中で、再来年にも移転の予定だという。ライカカメラ社の景気の良さは中国市場のカメラブームによるところが大きいそうだ。

ハッセルブラッド社は、日本の電機メーカーであるソニーと提携して、「ルナ」と称したソニーNEXに着ぐるみをかぶせたようなカメラを発表したが、ハッセルブラッド社と同じ海外企業であるライカカメラ社が、日本のパナソニック、富士通などの協力を仰ぎながら、その一方でメイン機の心臓部であるイメージャーは、独自のものを志向するという別のベクトルに向かっているところが異なる点だ。かつてカメラが精密機械であった時代から、電気制御となり、現在では記録方式そのものがデジタルとなり、製造企業も大きく変化している。